広報伊方町

発行所
愛媛県西宇和郡
伊方町
編集
町長公室
印刷所
尾上印刷所
八幡浜市天神通
電話 ㊀0091番

# こうなっています……13億円

## 47年度 町の家計簿報告

### 連続七年黒字決算

昭和四十七年度町の台所、一般会計、国保会計、水道会計、学校給食会計、公共用地先行取得特別会計などの決算ができました。

そこで町の家計簿を町民のみなさんに知っていただくため、ここにそのあらましを紹介しましょう。

昭和四十七年度の予算規模は、一般会計で十一億円、その他の全会計二億円、合計において十三億円となり、昭和四十六年度にくらべ三億円もの伸びをしめしました。

なお、一般会計は七年連続黒字決算となっています。

一般会計においては、昭和四十一年財政再建計画終了以来、七年連続黒字決算をみることができましたことは堅実な台所運営を維持しつづけているたまものです。

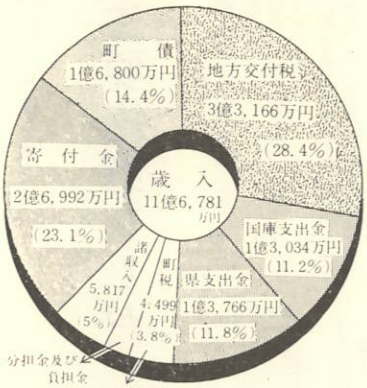
国保会計は、入ったお金が一億二千七百三十八万円、使ったお金が一億二千七百十七万円で差引き二十一万円の黒字決算となっていますが、入ったお金には、前年度からの繰越金四百九十万円が含まれ、使ったお金には、積立金が五十二万円あり、差引き四百三十八万円より黒字額の方が少額となり、単年度では実質収支四百十七万円の赤字で、国保会計は極度にひっ迫し健全財政を維持するうえに重大な危機に直面しています。

水道会計は、三百七十一万円の赤字決算になりました。

学校給食会計は、四十三年からはじまって早くも五年目を迎えますが、四十七年度は二万円の黒字となりました。

公共用地先行取得特別会計も二万円の黒字決算となりました。

### 入ったお金の構成




町税内訳

| | | |
|---|---|---|
| 町民税 | 1,290万円 | (29%) |
| 固定資産税 | 1,704万円 | (38%) |
| たばこ消費税 | 960万円 | (21%) |
| 電気ガス税 | 394万円 | (9%) |
| 軽自動車税 | 151万円 | (3%) |

### 使ったお金

10億5,184万円

◎は町民1人当りの額
(人口はS48.3.31現在で計算)
1世帯当り 426,364円

| | | |
|---|---|---|
| 歳出総額 | | ◎ 114,980円 |
| 議会費 | 1,439万円(1.4%) | ◎ 1,573円 |
| 総務費 | 1億1,811万円(11.2%) | ◎ 12,911円 |
| 民生費 | 1億0,037万円(9.6%) | ◎ 10,972円 |
| 衛生費 | 3,825万円(3.6%) | ◎ 4,181円 |
| 労働費 | 658万円(0.6%) | ◎ 719円 |
| 農林水産業費 | 1億8,291万円(17.4%) | ◎ 19,995円 |
| 商工費 | 282万円(0.3%) | ◎ 308円 |
| 土木費 | 2億7,906万円(26.6%) | ◎ 30,505円 |
| 消防費 | 974万円(0.9%) | ◎ 1,065円 |
| 教育費 | 1億9,514万円(18.5%) | ◎ 21,331円 |
| 災害復旧費 | 2,848万円(2.7%) | ◎ 3,133円 |
| 公債費 | 7,384万円(7.0%) | ◎ 8,072円 |
| 諸支出金 | 215万円(0.2%) | ◎ 235円 |

### 特別会計決算状況

| | 入ったお金 | 使ったお金 | 差引 |
|---|---|---|---|
| | 万円 | 万円 | 万円 |
| 国保会計 | 12,738 | 12,717 | 21 |
| 水道会計 | 1,562 | 1,933 | △371 |
| 学校給食会計 | 1,898 | 1,896 | 2 |
| 公共用地先行取得事業会計 | 65 | 63 | 2 |
| 墓地特別会計 | 45 | 176 | △131 |

### 町民1人あたりの税金

(人口はS48.3.31現在で計算)

| 総額 | 固定資産税 | 町民税 | たばこ消費税 | 電気ガス税 | 軽自動車税 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4,918円 | 1,863円 | 1,410円 | 1,049円 | 431円 | 165円 |

### 一般会計のあらまし

一般会計について、町の台所へどのようにお金が入り、どのように使われたか、グラフやカットをながめながら簡単にくだいてみましょう。

町の台所に入ったお金は、総額十一億六千七百八十一万円、使ったお金は十億五千百八十四万円で差引き一億一千五百九十七万円の黒字になっていますが、年度内に事業が終らず翌年度に繰越したお金が一億二千二百三万円あり、これに関連した未収入の特定財源が七百三十万円ありますので、その差額一億一千二百九十三万円は翌年度に繰越すべきですから、実質黒字はそれだけへって、四十七年度の実質収支は三百四万円の黒字となりました。

(前年度=四十六年=は四百二十四万円)

一般会計で七年連続の黒字決算となりましたことは、町政に対する町民のみなさんの深いご理解とご協力があってのことといえましょう。

#### 入ったお金(歳入)

#### 町税は四%

入ったお金のトップは、二十八%を占める地方交付税、ついで寄付金の二十三%、町債の十四%、県支出金十二%、国庫支出金の十一%の順位になっています。

国、県への依存財源である自動車重量譲与税、自動車取得交付税、地方交付税、国県支出金、地方債を合算しますと六十五・八%となり、四十六年度の七十四・一%にくらべ八・三%依存率は低くなっています。

自主財源の主軸である町税についてみてみますと、四十三年度が七・二%、四十四年度六・八%、四十五年度六・〇%、四十六年度四・七%、四十七年度においては三・八%と年次低下の傾向をしめし、十%をはるかに下まわる、まったくの一割自治の実態です。

こうしたなかで、財政力の弱さを克服し、町民の暮らしと町づくりのため積極的に建設事業を推進したあらわれです。

#### 使ったお金(歳出)

#### 建設事業に六億円

使ったお金では、土木費二十六・六%がトップで、ついで町見中改築費の含まれている教育費の十八・五%、農林水産業費の十七・四%、総務費十・二%、民生費九・六%とつづいています。

土木費が一位、教育費が二位、農林水産業費が三位と多くの投資的経費を含む科目が上位をしめています。

この使ったお金を性質別に分析してみますと、普通建設事業五十四%に災害復旧、失業対策事業の三・七%をプラスしますと投資的経費総額は五十七・七%にあたる六億円になります。

最後に使ったお金一億五千百八十四万円が、本町の一世帯当り、町民一人当りどのくらい使ったことになるかというと、一世帯当り四十二万六千三百六十四円、町民一人当り十一万四千九百八十円使った勘定になります。

### どういう施設ができたか

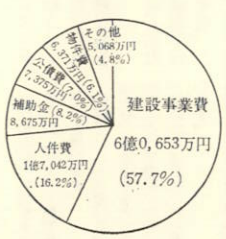
#### こんな施設ができました

より住みよく、より豊かな町づくりをめざす町では、昭和四十七年度には、予算総額の五十八%にあたる約六億円もの建設事業を実施しました。

その中には、町見中学校の改築(鉄筋三階建)郡内初のLL装置の完備(町見中)、スクールバス購入、約八キロメートルにおよぶ道路舗装など、つぎのような諸事業が遂行されました。

町見中学校改築費(関連工事含)一億一千三百二十五万円
町見中学校視聴覚教育施設一式一千万円
スクールバス購入二百七十五万円
湊浦集会所新築費九百九十五万円
鳥津集会所新築費二百三十万円
九町保育所増築費八百三十八万円
消防ポンプ格納庫新設(中浦、亀浦、田之浦)三百七十一万円
豚糞尿処理施設(九町西地区外六カ所)一千二百二十円万
亀浦臨港線新設工事二千万円
二見大松線改修七十三百八十九万円
湊浦伊方越線改修一千五百万円
湊浦河内線改修八百四十五万円
川永田豊之浦線改修八百万円
九町九町越線特殊改良工事七カ所六百四十九万円
宿名峠成安線改修四百四十七万円
鳥津大成線改修費四百万円
災害復旧工事(九町西地区外六カ所)一千二百二十円万
中浦出ケ谷線舗装一千五百万円
中之浜城之首線舗装一千三百万円
伊方越亀浦線舗装四百九十万円
仁田之浜農道舗装二百四十六万円
生活圏道路舗装五百万円
小中浦高吵対策二千三百十六万円
大浜護岸(消波工)新設一千四百四十三万円
大浜防波堤一千七十四万円
仁田之浜物揚場鋼管、方塊制作八百五十万円
町道亀浦町見線改修七十三百八十九万円
中浦海岸保全施設整備四百三万円
大成海岸保全施設整備八百四十三万円
伊方越漁港港内浚渫工事百万円
豊之浦漁港港内浚渫工事百万円
伊方越漁港(亀浦)局部改良七百三十七万円
黒島物揚場新設工事・五百万円
伊方越漁港関連道整備事業一千五十六万円
長崎線新設費三百六十九万円
河内農道新設費四百万円
河内上前田農道新設費五百万円
仁田之浜農道新設一千二百二十七万円
アワビ礁設置費五百五十二万円
並型魚礁設置費百五十万円
夏柑園再開発事業五百六十七万円
簡易下水道整備八百六万円
整備事業補助四千三百五十五万円

#### 性質別にみた使ったお金



# 昭和四十七年度 主要施策をくだく

昭和四十七年度の決算と同時に同年の主要施策の説明書ができあがりました。

町では、町民のくらしをよくするため、あの手この手の着想で努力しています。

そこで、町民のみなさんにわが伊方町が、どのような施策を展開してきたか、また、こんごどのような方向で〝伊方町の新しい豊かさ〟をもとめて行くのか、各部門別に分析し紹介しましょう。

## コミュニティづくりに 集会所を整備

◎総務企画部門

(総務企画部門に属するものは議会費、総務費、消防費、公債費支出金からなっています)

住民の生命と財産の安全を守るため、消防ポンプの購入(向)をはじめ、格納庫(中浦、亀浦、田之浦)、定置配管の新設(中之浜)、消火栓の増設(小中浦、湊浦)等、消防行政において、積極的な整備充実をはかりました。

また、コミュニティづくりの根拠地として、各部落の集会所を整備するため、四十七年度は湊浦、鳥津両地区の集会所を整備しました。

本町発足以来の大事業である原子力発電所は、四十七年十一月二十九日に原子炉設置許可がおり、四十八年六月十五日炉心部の基礎堀削工事に着手し、現在順調にその工事を進めておりますが、いまなお一部住民に根強い反対運動があり、憂慮している現状です。

しかし、この世紀の大事業である原子力発電所は、必ず成功させる信念のもとで、問題解決にあたりたいと考え、全町民のみなさんのあたたかいご理解とご支援が何より大切です。

## 高度福祉に全力

◎民生、衛生部門

(民生、衛生部門に属するものは民生費、衛生費、労働費です)

町民のくらしが健康で調和のとれた「住みよい町」となるためには、まず第一に町民福祉の拡充強化をはからなければなりません。

そこで、四十七年度は児童福祉老人福祉行政に積極的に取り組むため、職員の一名増員を行い、これに対処しました。

また、老人福祉行政については四十七年度新らたに老令福祉年金の支給制限者を対象に国の二分の一の額を老人福祉年金として支給、四十六年に発足しました老人医療費はその支給対象者を四十八年一月から国の制度が発足されるに伴って七十五歳から七十歳に引き下げ、長寿祝金についても八十五歳から八十歳にそれぞれ引き下げを行ないました。

また、ねたきり老人には、特殊寝台の貸与事業を前年度引きつづき実施、敬老会補助の大巾増額、独居老人のせわ役であるホームヘルパーの諸手当の改善等強力に推進しました。

児童福祉行政としては、児童手当の本格化に伴ない新らたに費目を設け、これに対処することとしたほか、保育所維持費の増額、非常勤保母賃金の計上等、福祉の増進をはかってまいりました。

産業の伸展、生活様式の変革による生活環境の破かいは都市公害に限定されることなく農村社会にまでも拡大してきました。

果樹産業においては、農薬危害をもたらし、養豚の降盛は水質汚だくを起こし、生活の高度化は海浜にゴミの山を築いたのであります。

そこで、第二番目として、健康管理体制の拡充をはかる必要があります。

四十七年度は特に、生活環境行政と保健衛生行政を強力に推進するため、栄養士の一名増員をはじめ、母子健康指導車の購入、出産手当を一人当り四千五百円を支給、火葬料の無料化をはかりました。

また、健康管理の先導的試行としての農薬危害実態調査は、中之浜、二見両地区に加え新らたに川永田地区を実施する等、健康管理体制の拡充を行うとともに、四国では初の試みとして、広域の豚糞尿処理施設の整備、簡易下水道の整備等、一連の生活環境保全対策においても積極的に取り組んできたのであります。

楽しい老後になるよう、各種の施策がほどこされました。

## 三線 農道新設

◎農林水産部門

(この部門は、農林水産業費、商工費からなっています)

町民経済の安定と伸展により「住みつくる町」となるためには、「生産資本の充実」を中核として、時代に即応した農業、漁業の構造改善を強力に推進する諸施策が必要です。

まず、農業所得の安定と農業構造の改善策として、夏柑品種更新事業、小規模かん水施設、温州ミカン出荷貯蔵庫、黒島物揚場新設夏柑園再開発事業、仁田之浜農道河内農道、河内上前田農道の新設舗装では仁田之浜農道等、農道整備を中心とした農業生産資本の充実をはかってまいりました。

また、土地に関する基本となる事業として、四十七年度から新らたに本町全域にわたる地籍調査を十年計画で実施することとし、四十七年度は大浜、中之浜地区一・七平方キロを調査測量しました。

一方、漁業振興策としまして、前年度に引きつづき並型魚礁、アワビ礁等の投入を実施しましたが、こんごも水産資源の開発に積極的にとりくんでいく必要があります。

また、漁港の整備として伊方越漁港関連道整備、亀浦防波堤の延長、伊方、大成両漁港の海岸保全施設整備、豊之浦漁港のしゅんせつのほか、港湾においても仁田之浜物揚場新設、大浜防波堤延長等により過密現象を生じ、反面、地遂次漁港、港湾の整備も行ない水産業生産資本の充実をはかっています。

## 町見中を改築 (鉄筋三階建)

郡内初のLL装置

◎教育文化部門

(教育費の一款のみです)

教育と文化の香り高い「住みたくなる町」であるためには、積極的な「教育資本の整備充実」による町民生涯教育体制の確立をはかることが重要です。

そこで、学校教育においては、町見中学校危険校舎改築(写真)郡内では初のLL装置の設置、豊之浦小改築関連事業及九町小校舎屋根塗装工事等、教育施設の整備充実に努める一方、修学旅行費補助を小学生二千円、中学生三千円に大巾増額しました。

社会教育においても、中央公民館を拠点にして、各種の学級、催物、料理講座等一連の社会教育活動を展開し、図書の大量購入、部落公民館主事手当の増額など、その内容充実をはかりました。

保健体育の方面では、伊方小運動場整備、有寿来小運動場土工事など、その施設の整備をはかるほかスポーツ少年団、健康クラブの育成、体位向上対策に小学生の机、イスの整備も実施しました。

## 町道舗装八千メートル

◎土木、建築部門

(土木費、災害復旧費の二つです)

快適な生活環境をより充実さすため「生活資本の充実」を強力に推進することが必要です。

なかでも、集落を結ぶ主要道路の整備は急を要します。

そこで、四十七年度は、中之浜城の首線、伊方越亀浦線、伊方大川新田線、鳥津臨港線、四十二号線など主要道路の完全舗装を延長約八千メートル総事業費三千八百万円を投入して実現させたほか、湊浦伊方越線、二見大松線、亀浦町見線、湊浦河内線、川永田豊之浦線等の拡張工事、亀浦臨港線、九町長崎線の新設工事等、いわゆる生活圏道路の整備に着手しました。

こんごは、これらの生活圏道路の拡張工事はもちろんのこと、全線舗装の早期実現を強力に推進していく必要があります。

そのほか、港湾建設事業として小中浦地区の高潮対策事業を継続事業として実施しています。

# 新しい豊かさの追求

## 理想の郷土づくりを (帰ってきた くなる町)

◎結　論

昭和三十年代以降、わが国経済は、飛躍的な成長を遂げたが、大都市においては、産業人口の集中により過密現象を生じ、反面、地方農山漁村においては、とどめも設の整備を遅らせ、人口減少にいっそうの拍車をかけるとともに、年令構成を老令化し、出生率は低下し、ついには人口の自然減少をもたらすという悪循環を拡大する原因となっています。

このような、過疎現象の中で、人口減少を防止し地域社会の生活生産資本の基盤強化、住民福祉の向上等、地域開発を積極的に推進さすために、その起爆剤として誘致した原子力発電所は、ようやく四十八年六月十五日炉心部の基礎堀削工事に着手し、昭和五十二年四月の運転開始をめざし順調にその工事が進んでいます。

しかし、いまなお一部住民に反発と抵抗を受けており、憂慮している現状です。

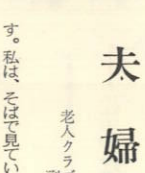
町づくりに住民が参加し、住民が納得する行政諸施策を推進することは、非常に重要なことです。

しかしながら、住民運動は、一つの要求をあくまで貫くために、抗議や闘争といった強い形で進められて行くのであり、この直接の声のみを聞くことは、選挙の手続きを踏まえた議会民主主義を根底から崩壊させることとなるのです。

すなわち、どのような、住民運動も最終的には、議会に集約されなければならないものであり、本町の場合にあっても一日も早く対立論争の事態から現実的な政治の場に戻さなければならないことは申すまでもありません。

本町の開発が住民の福祉向上にどのように貢献するか、常に見直し、見極め、経済の発展と福祉の調和のとれた開発政策を地道に積み上げ、新しい豊かさを追求し「帰えってきたくなる町」となるように進めて行かなければなりません。

## ちょっと一言



### 夫婦愛

老人クラブ連合会副会長　上島竹松

私は、本年明けて八十三歳になり、妻は八十歳です。

私たち夫婦は結婚してより満六十年になります。

ところが、妻は何年前からか体が弱くなった関係上、日常のことは、私が行っています。

浪曲の一節にある「妻は夫をいたわりつ、夫は妻をしたいつつ」とは反対の「夫は妻をいたわりつ、妻は夫をしたいつつ」の毎日でその日、その日の炊事洗たく等を引受けております。

これすなわち、夫婦間の行き方と思います。

妻は時々、風邪を引きます。その時、せきが出てつらそうです。

妻は六十年近い間、朝となく夕となく、不平一ついわず炊事洗たくをしてくれたと思えば、何となく有難さが身にしみて、感謝の気持がこみあげてきます。なにはともあれ、夫婦ほどよいものはありません。

これからも、夫婦愛を大切にして、二人仲よく元気で長生きしたいと思います。

同時に、八十三歳になったとは申せ、老友と手をとりあって町老人クラブ発展のため、力いっぱいがんばりたいとも思っています。

## <町づくりの声を>

よりよいわたしたちの町伊方町をつくるために、みなさんのきたんのないご意見をお寄せください。お寄せいただいたご意見は、町づくりのために生かし、また、広報紙などにも紹介したいと思います。

あて先　役場町長公室

# 栄えある代表をたたえる

新しい明けとともに、全国では石油危機、物価高騰、物不足、買しめ、売りおしみと暗い記事の連続ですが、本町では、明るいニュース二題をここにお知らせします。

その一つは、すでに広報新年号で紹介していますように、第二十回NHK青年の主張全国コンクール全国大会に四国地区代表として大浜の前田昌美さんが、全国九地区の代表とともに、一月十五日全国津々浦々へテレビの生放映で堂々と意見発表を行なったことであります。

また、もう一つは、豊之浦の竹内浄子さん（川之石高校実習助手として勤務＝川之石高校四年＝）が、第十一回愛媛県高等学校定時制通信生徒生活体験発表大会で〝最優秀賞〟に輝きました。

竹内さんは県代表として四十八年十一月二十五日東京の全国体育会館で行なわれた全国大会に出場（全国代表者十七人）し見事全国理工専門学校賞（全国で五人）を受賞しました。

「このまま終るのは、惜しい。もっと多くの人に聞いてもらいたい……」などの声が多数あり、そこで、この際に、仕事の都合で聞くことができなかった人たちのため、同じ年代の若者に是非読んでもらいたい。また、二人を祝福するため、臨時ページを設けてその原文を紹介することにしました。

## これからの社会と青年の役割

第20回NHK青年の主張全国コンクール全国大会 四国地区代表

前田昌美

「ゆりかごから墓場まで」……北ヨーロッパの恵まれた国でしか使われなかったこの言葉が、日本の福祉行政の中で、今、大きくはばたこうとしています。

けれどもいっぽうでは、一人暮らしの老人が誰の手にも届かない所で悲惨な死を遂げ、何日も気づかれずにいたという事実があとを絶たないのです。

町役場の福祉課に勤める私は、ある日、同僚と、そうした不幸をなくすことを目的に設けた相互連絡電話の利用状況を調査するため、町内の一人暮らしの老人の家を訪ねました。

その反応はさまざまでした。

「毎日朝晩使うとるが」と笑顔で迎えてくれる人や、「もったいのうてまだ使っとらん」と、とまどっている人、そして「電話したら世話になっている」と言うのです。

「連絡電話の片方は、すぐ近くの所へ取り付けたかったのだけれど、意見がありあわないので他人のおとなごやかで暖かいものでしょう。

あるお年寄りから、私は胸をえぐられるような言葉を耳にしたのです。

「とても使えるかい」「これを使う時は死ぬ時じゃ」などと私たちを驚かせたのです。

まるで、宝物でももらったかのようなお年寄りに、「毎日挨拶だけでもした方が相手の人も安心するのだから」と話しているうち、

また残る人たちも家庭を持てば独立していく核家族化。それは今、むしろ常識のようになってしまいました。

若い夫婦だけの生活は、たしかに、意見がありあわないので他人のおなごやかで暖かいものでしょう。

やむなく核家族になるけれども、それは自分たちの両親の犠牲の上に成り立っている場合もあるのです。

こどもは親を踏み台にして大きく飛躍していくものかもしれませんが、その踏み台は壊してしまう高収入の都会へと就職していきます。

多くの若者は、ふるさとを去りたくない。

老人福祉施設、老令年金など、福祉行政が重点政策とされていながら、なぜ、親子のきずなはどんどんかけ離れていくのでしょうか。

こどもは親を踏み台にして大きく飛躍していくものかもしれませんが、その踏み台は壊してしまう高収入の都会へと就職していきます。

なにげないひと言のあいさつや、ちょっとした心づかいが、どれほど、お年寄りの心を和らげ豊かにさせることでしょう。

年をとればとるほどかたくなな心や意地を捨て、若者もお年寄りもつきたての米の餅のように、どんな形にも変化できる柔かく弾力性のある心を持ち、なごやかな人間関係を作りたいと私は思います。

こんなことがありました。

縁側で話していたおばあさんがふと畑をみて、「ごぼうの葉が裏がえしになっているから明日は雨だ」とつぶやいたのです。

その翌日、本当に雨が降ってきたのに驚き、訪ねていった私に、そのおばあさんは、長年の苦労話なりっぱな物もいらないから、こどもといっしょに暮らしたい」そういろいろな自然との結びつきを話してくださったのです。

このように、お年寄りの中には私たちでは考えもつかないような生活の知恵を持った人がたくさんいます。

長い人生からくみ取ったお年寄りの豊富な経験を学び、国家行政だけに頼ることなく、やさしさといたわりの眼を開いていくよう、まず私たち若者一人一人から努力していこうではありませんか。

そしてまた、古き良き文化遺産と、新しい文明の歯車をガッチリと組み合わせ、すべての人が手をつなぎあって生きていけるよう努めることが、私たち青年の役割だと信じます。

## 私に生きる父

全国理工専門学校賞

川之石高校四年 竹内浄子

皆さん、昔から、誰にでも一つや二つ自分の人生に強く印象に残る思い出をもって生きているものだと言われますが、私にも終生忘れることのできない父との悲しくまた楽しかった父や、あるいは、そして、又なつかしく勇気づけられる想い出を秘めて、今なお、高校生活をつづけています。

それは、高校進学をひかえた、今から四年前の寒い日のことでした。

数日前より体の調子が悪くて床についた父が、「そんなに無理なことを言うな、そりゃ、父ちゃんも、お前を高校に行かしてやりたいが、どうにもならん。それが、わからんのか」常日頃は無口でおとなしい父の声が、とてつもなく、大きく、重々しく、泣きながら座ぶとんに飛びたした私のうしろから、つきささるように響いてくるのでした。

「どうして…どうして…」同じ言葉が胸にこみあげて……」

頭の中は混乱するばかりでした。

お金さえあればという思いと、お金のないことを理由に当然のように進学するという父の態度に腹立たしさを感じ、とめどもなく泣けてくるのでした。

この時ほど私には、お金の存在というものが恐ろしく、大きくもえた事はありませんでした。

それ以来、父への反発心のみがつのり、数か月間父との対話がなかなかできませんでした。

しかし、入学当時は、様々の悩みや出来事に日夜苦しんだものでした。生まれて初めての勤め。夜間の学校。そして、下宿生活。どれにも緊張のしっぱなしで、授業を終えて下宿に帰ると、ぐったりして服のままで寝てしまったこともありました。

夕食をとる間もなく学校へ走って行く時、楽しそうに笑いながらよく笑ったものでしたが、父のほうとの気持がわかりかけてきたように思えます。

また、定時制に来て、周りの励まし自分から積極的に受入れ、種々の大会や学校行事に参加することから、身につけた社会性でしょうか、自分が働いて得たお金を有効に使う生活の知恵や喜びも身につけ、自分のことで精一杯だった入学当時とくらべて、他人の立場にもなって考えてあげられるように成長したと思います。

昨年の春のことです。一時体を活していたので、父の気持もわかろうと私なりに努力しましたが、どうしても当時の私には、理解することができませんでした。

このような中で、「現代の女性は、学問を必ず必要とする時なんだ。働きながらでもしっかりやりたまえ」という恩師の暖かい勧めもあり、不安と希望をもって定時制に入学し、初めて両親と別れて過ごすことになりました。

今年で四年目の定時制をむかえ、まがりなりにも自分の力でもって一人歩きできるようになりました。

しかし、今まで皆勤で通してきた自分を思う時、私の体には、どこか、父の貧しくとも、仕事に忠実でまじめに生きてきた六十年のその姿から何かを受けついでいるのじゃないかと思えるようになりました。

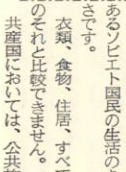
そうして、父の人間性までも知ってあげようとする心によりやくなり、父を見る目も大分変ってきました。

「父ちゃんはのう、頭も金も力もないが、昔からお前のいちゃんによく言われたように、朝おきたら、『おはよう』お世話になったら、『ありがとう』、失礼したら『すみません』という心だけはいつも腹にすえてきたんじゃ」と下校して行く全日制の人達を、うらやましく、ねたましく思えることがありました。

その都度、父とやりあったあの日の出来事が走馬燈のようになつかしく浮かんでくるのでした。

しかし、今まで皆勤で通してきた自分を思う時、私の体には、どこか、父の貧しくとも、仕事に忠実でまじめに生きてきた六十年のその姿から何かを受けついでいるのじゃないかと思えるようになりました。

昨年の春のことです。一時体を



もちなおしていた父の容体が急に悪化し、急拠入院ということになりました。

私も驚き、病院にかけつけましたが、久しぶりに見る父の顔は、すでにみる影もなく、四年前、厳しく叱られたあの力強い言葉などは想像もできない状態でした。そのうち私に気付いたのでしょうか、うっすらと目を開け、「浄子…浄子…」とかぼそい声を出して私の方へ手を精一杯さしだしました。

私は、「父ちゃん、来たよ、元気になってよ」と大声で話しかけましたが、もう表情にもつかれた様子が出て、ただ一言、「すまんのう」と低くしずんだ声でいうのみでした。

それから悲しい知らせを聞かされたのは数時間後でした。

肝硬変とカルテに書かれた文字、やりきれない悲しみなど、色々なことが胸につかえ、とめどもなく涙がふれたものでした。

このようにして、さみしい父との別れの中で、色々な思い出が浮かんできます。

あれからもう一年。

父の墓前にたたずんで父を思う時、父の「すまんのう」というあの一言が何を言いたかったのか少しづつわかるようになりました。

経済的には、たいしたこともくれなかった父ですが、今、私の心の中に大きく、心の豊かな人として、誇りにさえおもえるのです。

世の中には、地位や名誉、財産と、人の心を無視してまで出世しようとしたり、自己中心的に物事を考えてしまう人々が多い時代に、父が残した、「おはよう」「ありがとう」「すみません」の、あの平凡で簡単な言葉が私には、さわやかに心暖まるものとして生きております。

そして人生には、ほんとうに大切なものではないろうか と父の生活信条をかみしめております。

青年は、明日に生きると言われます。

私は、今、保母を目ざし日夜、夢と希望に胸をふくらませて勉学に励んでおります。

父との別離を悲しみとせず私の心の中に生きる父として、共に『おはよう』『ありがとう』『すみません』の人生を歩みたいと思います。

## ソビエト見聞記 (2)

### 農場の一区画

コルホーズ

北海道の二分の一程度です。

約一千ヘクタール

キシニョフはソビエトの西南部に位置し、黒海のすぐ北にあります。

第二次大戦以前は、ルーマニア領であり面積は

ここはブドウの産地で、二億人にブドウ酒一リットルづつ与えることができるほど、莫大なブドウが生産されています。

私たちはここでコルホーズ農場、学校、託児所等を見学しました。

農場には、トウモロコシ、ヒマワリ、ブドウが植えられており、

柑橘類は余くありません。

この農場の一区画が約一千ヘクタールで気の遠くなるような広さの土地を約五十人ばかりの人たちで管理しているのです。

区画整備され土地を大型機械をフルに使っており驚嘆しました。

見学後、コルホーズの方々に歓迎パーティーを受けたのですが踊ったり、歌ったり、たびかさなる乾杯に酔い、ことばは十分通じなくとも、本当にお互いに感激し、最後に両国の発展と友交を誓って別れを惜しみました。

### 農業面

質よりも量が第一

私は、この十一日間の旅を終えて感じたことは、共産国の筆頭であるソビエト国民の生活のきびしさです。

衣類、食物、住居、すべて日本のそれと比較できません。

共産国においては、公共施設は発達していると聞きますが、私の見た限りでは決してそうとは思えなく、地方へ行けば子どもたちの体育館すら見当りませんし、学校の施設、備品等も十分ではないようでした。

また、農業面の面を見ますと、まだ質より量の時代で品種改良にしても、とにかく量の多くとれる品種改良です。

技術面を見ますと、灌水の効果は知っていても、天の恵みを待っている状態でした。

ソビエトの農民は、ほとんどが公務員です。どの農場の悩みも、農民にいかにして労働意欲をわかせるかで、ある農場では最高に働いた者には、テレビをたすとか自転車をプレゼントしようとか、いろいろな手で労働意欲のもりあげに四苦八苦していました。

しかしながら、私はこの国に脅威を感じさせられました。というのはまだまったく開発されていない莫大な土地と資源です。

飛行機からみますと、モスクワの近くまで原野が続いており、これが開発されると想像もつかぬ程の国になるのではないかと思いました。

つぎに若者が非常に勉強していることです。

公園でも本を開けている若者がたくさんおり、事実ソビエトではいま教育に非常な力を入れているようでした。

つぎには、ロシア人が非常に忍耐することに慣らされている点です。

彼等は、規制された生活の中にロシア人であるという強い自信と誇りを持っていました。

私は、この旅行で多く反省させられ、考えさせられました。

また、たいへん勉強にもなった旅でした。

## きびしい国民生活

勤勉な若者

九町 山口武美

# はたちのことば

## これから権利・義務・責任が生じます

ことし成人を迎えた、新成人を祝福する〝成人式〟が一月十五日中央公民館で行われました。

当日は、四十四人が出席し多くの方々から祝辞を受け、みんな真剣な表情で励ましの言葉に耳をかたむけていました。

これからは、大人として政治に参画し自己の責任と判断で人のため、世のため尽すことになるわけです。こうした人たちは、こんご伊方町を背負って立ち、町発展の原動力になるものと信じます。

特に本町の成人式で、特筆すべきことは、女性の服装は全員洋服姿で参加することです。ことしで五年連続して服装の簡素化が実現しました。

「石油危機」とか、「節約が美徳」が流行語となっている現今、たいへん結構なことです。

つぎに成人を迎えた人たちの中から六人の方々に代表していただき、昨年同様に大人となった抱負や感想を「はたちのことば」と題し紹介しました。

新しく成人となった若者が、大人の社会、日本の現状をどういうふうにとらえ、考えているのか、これらを理解し、知るうえによい機会でもあります。

今日の青年はどのような目的観を持ち生活をしているのでしょうか。それは、ただエゴイズム（自己主義）という一つではないでしょうか。

「自分には利益がないよう何もしない」とか、「自分には関係がないから何もしない」というように、他の人はどうであろうと、自分さえよければよいという、自己中心の考えかしか持たず、ただ目先のことだけにとらわれているのではないでしょうか。

ソクラテスの言葉に〝知らぬということほど、恐しいものはない〟という言葉があるように、無関心ということほど、無責任なことはない。

無関心という言葉は、青年の敵です。

青年であるなら青年らしく、あらゆる世間のことを体験し、知識欲を燃して、多くのことを自分で吸収して行くべきではないかと思います。

### 除きたい自己主義

河内 土井 富美男

自分のできる限りの力をふりしぼって頑張って行こうではありませんか。

成人式で受けた新鮮な心境を生涯忘れることなく生きて行こうと思います。

〝一人立ち〟の精神で、一人一人が自己の使命を自覚する時に、国家をも動かす偉大な力として発揮できるのではないでしょうか。

その先駆を切るのは、才眉なき私たち若者がやらなければ誰がやるでしょうか。

### 尊重したい相手の立場

大浜 水本 いつ子

いままでハイティーンとして、あまり気にかけずにいた二十歳という言葉が、ずっしりと耳に響きます。でも、それが何かと聞かれてもはっきりわかりません。ただいえることは、いままでの私ではいけないということです。

いままでは、相手の立場というものをあまり考えず、自分の言いたいこと、思っていることをずばずば言ってきたし、また、したいことはなんの気にもとめずしてきました。そういう生き方が、間違っているとは思いません。

でも、相手の立場を考えてみると、思いやりの心がなかったのではないかと思います。

現在まで歩んできた自分をふりかえってみますと、職場や青年団活動などの中において、自己主張を強くしすぎたために相手の気持ちを害し、立場を悪くしたのではないか、と思われることが数多くあるように思います。

一歩社会へ目を向けてみても、そのことが原因でおこる、いやな出来事がたくさんあります。

ひき逃げ、売りおしみ、買いしめなど多くの人が困っているのもそのためではないでしょうか。

本日の日を境に、相手の立場になって考え方ができる人間めざして努力して行きたいと思います。

お互いに相手のことを思いやる心が持てるようになれば、この世の中もどんなに明るくなごやかになることでしょう。

### 人間としての責任

豊之浦 井上 善文

私は、中学の時以来、中学の担任の先生のよく言われた「よく学び、よく遊べ」という言葉をいつも心において生きたように思う。

高校時代は「よく遊び、よく遊べ」となったこともありましたが、この言葉は、私の一番大切な言葉でした。

でも、成人の日を迎えたからには「よく学び、よく遊べ」では、どうも子どもぽくていけない。

そこで、成人らしい何かいい言葉はないものかと考えました。

成人すれば社会の一員として責任ある行動をとらねばならない、とも言われるし、そうかといってこうした堅苦しい言葉にとらわれないで生きたいし、二十歳とはいっても、私はいま青春であると言えます。

「青春はすべてが実験である」という言葉もあるように、私はいま、何でもやってみたい気持ていっぱいです。

いろんな人と話し、いろいろな所へ行き、いろんなものを見て苦しみながら、悩みながら、失敗しながら、みっともなくなって、かっこ悪くなって、とにかくいろんなことを自分のこの手で、この体でやってみたい。

しかし、私は、この社会で生きている以上、やはり社会の一員としての責任を考えすにはおられません。法のもとでも、私は、これからは責任ある一人の大人として扱われます。

社会人としての責任は、法の下における責任よりも、もっともっと大きな「責任」があるように思われます。人間としての責任というのでしょうか。

たとえば、現在叫ばれ続けている石油危機の中で、誰れそれが山の中に何リットルの灯油を隠していたというものです。

このような行為は法律を犯しているというばかりでなく、人間としての責任を忘れているように思えてなりません。このことが、私たちにこれから与えられる選挙権についても言えます。

買収とかいう選挙違反を法律の目をくぐって当選して、堂々としている人間がいる。地位と名声のためには、手段を選ばぬ人間がいるが、こうした人も、そしてまた、金をもらって投票するという人間かりでなく、過去の歴史の中で尾崎行雄をはじめ、多くの人々の努力によって、やっと獲得したこの選挙権というものの重要性、意義を見失ってしまっている。しかもこの行為は本当に人間としても恥るべき行為だと思うのです。

「責任」「社会人として」の責任、「人間としての責任」、これらを深く考えたうえで、私は、現在を若者として、自分なりに生きて行こうと思います。

### 伸ばそう無限の可能性

二見 高野 正子

いろいろ教えられた学生生活を終え、この一年間未熟ながらも社会人として、私には一日一日が勉強になり、学ぶことも数限りなくありました。

大人の仲間入りの成人式を迎えて、まだ十代に心残りのあるような私には、あまりにも早く二十歳も自分の行動には、責任をとるとがきてしまったようで漠然とするばかりです。

でも、まわりの方々から祝福されるとなんとなく二十歳になったという実感がわき、自由という喜びに満たされると同時に責任ということに少し不安を感じさせられます。

しかし、どんなささいなことでも自分の行動には、責任をとるという姿勢を身につけて行きたいと思っています。

よく三無主義という無気力、無責任、無関心のことを言っていますが、いまの私たちのような自由のある時代において、とことん自分の力をためして、いまの世の中に満足できないのであれば、より一層持っている若いエネルギーの全てを発揮し、理想の社会を築きあげなくてはいけないのではないでしょうか。

そして、自分にもっと強く、いつも生きていることに喜びを感じさらによりよい社会生活を築き人でも多くのことを得ることが二十歳になった私たちの自己形成には必要なことだと思います。

ある人が「若者には、無限の可能性がある」ということを言っています。

この無限の可能性は、日々の営々とした努力の積み重ねによってその実現が可能であるということだそうです。そこで、私たちも現在に妥協せず、何事においても前をみて進みたいものです。

また、そうすることが自分の可能性を伸ばして行くことにつながるのではないでしょうか。

「百里の道も一歩から」ということわざもあるように、これからの私たちは、夢を大きく持ちしかも歩みは着実に一日一日を大切にし、努力を積み重ねて行きたいと思います。

### 人間関係＝広い心で

久保 松田 加代美

昨年の三月、学校を卒業したばかりの未完成の私が、はじめて親元をはなれ、職場と下宿という全く他人との生活の中で、いろいろと体験し、仕事のきびしさ、先輩、同僚のやさしさ、下宿先のお人として生きて行く以上、失いたくないと思います。

さて、私たちはすべてに恵まれた時代に育ち、捨てる文化とか、世はまさに消費時代とが言われ、何不自由なく暮してきましたが、こうしたことも一つの試練として、物を大切に生かして使って行きたいものだと思います。

小さい頃、母から「女の子は清く、によやかに育ってほしい」と言われました。

いまになって考えてみますと、女らしくうるおいのある娘……という意味なのでしょうか。

職場においても、家庭でも、女として優しさをだして行きたいと思います。

成人に達しますと選挙権もできます。

社会からも、一人前の人間として認められますが、責任も重くなります。

いままでは、両親のひ護のもとぬくぬくと育ってきましたが、これからは、自分なりに、一生懸命苦しんだり、考えたりしながら、生きて行きたいと思います。

学校時代にはなかった世の中の複雑さ、むずかしさも少しづつ判るようになり、相手の立場や気持ちを尊重して心を広く持ち、対人関係にプラスして行きたいと思います。

「鉄は熱いうちに打て」と言う言葉がありますが、いまの一日一日の生活が未来の生活の糧となるよう、精一杯頑張りたいと思います。

### 大切な協力精神

湊浦 政木 吉久

成人の日を迎えるにあたって、こんど、私たち成人となる一人一人が、どのような気持で大人の世界に入って行けばよいか、どのような心構えが必要であるか、こうした点について考えてみました。

学生時代を終え、職場についてもいても、やはり成人式を迎えていない「未成年」ということで、社会に対するあまえのような気持があり、しかも親のひ護のもとで社会的な責任もおわず、公共性ということも考えず、自分本位の毎日をすごしてきました。しかし、これからはちがいます。いろいろな人が、どのような気持で大人の世界に入って行けばよいか、どのような心構えが必要であるか、こうした点について考えてみました。

第一に選挙権が与えられます。

それから喫煙、飲酒、結婚の自由があります。それと同時に義務が生じてきます。

権利ばかりを主張せず、社会の秩序を乱さないよう努力して行きたいと思っています。また筋の通った社会になって行くよう願って行きたいと思います。

つぎに、伊方町に住む以上、町内の人たちと仲よくすることはいうまでもなく、みんなで協力しあって生活し、明るい町づくりを推進して行くべきです。

町民のみなさんが、よりよい社会、よりよい伊方を築いていくためには、一人一人の協力が、また意識統一が必要だと思います。

何を行うにもみんなと協力しあうことができる人間に、そして、自分の行動、発言に責任をもてるけじめのある人間になるよう努力して行きたいと思います。

# 無火災めざそう

## 新春をかざる出初式

新春を飾る恒例の本町消防団出初式が一月八日伊万中学校校庭で行われました。

ことしの出初式は、例年になく暖かな好天にめぐまれ、古川団長以下三百五十人、女子大防隊員二十人が「町民の生命、財産を火災からまもる」と頑姿を誇ろうしました。

人員、服装、姿勢の点検、機械器具の点検、ポンプ操法、小隊別規律正しい整列行進が、つぎつぎと行われ消防団員らしくきびきびした規律正しい整列行進は、多数列席の来賓者から絶大なる拍手がありました。

最後に放水前で一斉放水が行われ、二十二本の水柱が冬空にのびる中で煙が無い、七色のアーチがくっきり浮かび、新しい年のはじめをいろどるにふさわしい出初式でした。

なお、出初式の会場で多年にわたり消防活動に従事して功績のあった、つぎの方々がそれぞれの表彰に輝きました。

◎県知事表彰

功労章　上野弘（河内）

◎県消防協会長表彰

樋口剛（仁田之浦）　門田勝志（中之浦）　山口駒雄（河内）　川縁好恵（奥）　平家敏夫（加周）　山岡喜太郎（田之浦）　井桜清司（吉屋敷）

◎八西消防連合会長表彰

中藤五朗（大浜）　福山賢一（河内）　木下力（海浦）　吉本高治（小中浦）　与品亀夫（向）　岡本求（畑）　谷村正久仁（久保）　松村茂樹（二見）　池田喜紀（吉浦）　久保佑則（大成）

◎無火災分団表彰

第一分団（大浜）＝三年
第四分団（河内）＝四年
第九分団（豊代浦）＝三年
第十三分団（向）＝三年
第十七分団（加周）＝五年
第二十分団（大成）＝五年

◎町長表彰

河野修（大浜）　上田クニ子（大浜）　堀口栄作（中之浜）　田中康司（仁田之浜）　田上キヨセ（仁田之浜）　上野修二（河内）　村上清春（奥浦）　吉本正照（小中浦）　矢野義平（中浦）　竹内晴博（川永田）　神野敏（伊方越）　阿部登雄（亀浦）　辻宗徳（奥）　堀内一郎（向）　得能作蔵（畑）　堀江文一（西）　高野実（二見）　山下俊博（加周）　山岡正明（田之浦）　上野真喜男（吉屋敷）　古田伊勢春（大成）　鳥津忠明（鳥津）

◎町長・団長感謝状

安部安（河内）　宇都宮永（中浦）　藤原昇（向）　得能敏（畑）　熊鳥敏（畑）　池田稔（須賀）　羅田義兼（保内町）＝亀浦出身）　矢野勝蔵（中浦＝伊方中）

＝敬称略＝

＝威風堂々の行進＝
この人たちが出動することのないようみんなで注意

## 注意

### 石油ストーブ プロパンガスの取扱い

ことしの冬は、雨が降らず天気予報では、連日異常乾燥注意報がでています。

これを反映してか、全国各地でも例年になく火災が多く、尊い人命や貴重な財産が失われており、特に焼死者の数が激増の傾向です。

毎年のことながら二月～三月の春先きは、空気が乾燥して非常に火災が発生しやすい状態下にあります。

火災を未然に防止するには、日頃の注意と準備が何より大切です。

家庭や職場の消火器は、いざという時に役立つようになっていますか、必ず定期的に点検しておきましょう。

また、石油ストーブ、プロパンガスの取扱い方法、風呂の炊き口の点検、注意しあいましょう。

バケツ一杯の水でも初期消火には、たいへん効果があります。

風呂水は夜すてないように、寝る前に炊き口の総点検をするなど、こまかい心づかいが火災発生を防ぐ手段でもあります。

## ××消費者の窓××

### ものを捨てないくふう 限られた資源を大切に

◎モノ不足問題が全国的に広がっていますが、石油はともかく、それ以外の生活必需品については、本当に供給の絶対量が不足しているとは思われません。

ただ国民はものの豊富にまかせて、ぜいたく慣れ、使いすての風潮をなんともしないような生活をしてきたので、石油の不足は大きなショックです。

私たちの身のまわりは石油からの産物でいっぱいです。

石油の危機にあたって私たちはすべての物を大切に、使うまで使うことと世間のテマに迷わされて、買いためをしないようにすること、業者の買い占め、売り惜しみを監視しましょう。

◎消費者のみなさん、あわててつられ買いをすることは、物価値上りのもととなり、自分で自分の首をしめていくようなものです。

一人一人がじっくりと考えて行動したいものです。

## 保育ノート (7)

### あいさつ

加周保育所
主任保母　畑山千沙子

四月入園当初は、お母さんを迎えて泣いていた子どもたちもいまでは、元気よく喜んで登所してきます。

「先生、おはよう」「おはようございます、○○ちゃん元気がいいね。お顔洗ってきた？」と、手をとり・この子は、今朝は元気がいいな、気嫌もよさそうだ・と視診します。

「おはよう」と片言でも、言って元気よく走ってくると、いやな気持でいても「さあ／今日も一日がんばらなくちゃ」と張りきって一日がはじまります。

二～三歳の小さい子は、素直に先生に教えられたとおり、言えますが、少し大きくなると、何となく恥ずかしくなって、声をかけても黙って部屋へ入っているようです。

小学生、中学生と進級すると、なおさらのようです。

近所隣り同志でも、言いそびれると、あいさつが出来ない人が、いるようです。

小さい時にしつけられた習慣というものは、「三つ子の魂百まで」と言われるように大切なものだと思います。

各家庭でも、お父さん、お母さんの方から・おはよう・・おやすみ・・ありがとう・・ごめんなさい・など、気軽にあいさつをしていただきたいと思います。

お父さんが遠くに働きに行っていると家庭では、月々送金してとられたら「どうもありがとう、ご苦労様でした」と感謝の気持を手紙にあらわされたら、どんなにかお父さんが仕事のはげみになることでしょう。

一言々々のあいさつが、人と人との心の交流となり、楽しい世の中となることと思います。

世にでもあいさつのできる、子どもさんになるよう、家庭での指導をお願いします。

おはようございます
＝今朝も元気よくあいさつのできるよい子たち＝

## 定期交通事故相談所の開設

交通事故相談については、現在まで県庁内に相談所が開設されていましたが、昭和49年1月から利用者の便宜をはかるため、各県事務所（松山をのぞく）ごとに定期的に開設されることになりました。

○相談日　2月25日（月）　3月25日（月）
○場　所　八幡浜県事務所
○受　付…午前10時から午後3時
○相　談…午前10時から午後4時
○相談員　県交通事故相談所相談員

## 行政相談のすすめ

### こういう人はいませんか 役所の仕事について

テキパキやってもらえない
不親切なあつかいを受けた
納得できない
どうしてよいかわからない
どうしてほしい

### こういうものをあつかいます

行政相談であつかうのは、国の役所の仕事をはじめ、国鉄、電々公社、専売公社、公庫、事業団などのように、国から特別の監督をうけている法人の仕事。

県や町などの仕事のうちで国から任せられている仕事についての苦情です。

### こうして申し出てください

直接口頭でできることをすすめますが、簡単なものは手紙でも電話でも結構です。

◎申込先　行政相談員
渡辺　定幸（小中浦）
電話八一〇〇一八

## 善意欄

### 献本に感謝

亀浦の安部恵子さんより中央公民館内にある図書館へ「鬼と死と愛」他二十一冊の献本がありました。

ここに紙上より厚くお礼申し上げますとともに、このあたたかい善意の本を有意義に利用させていただきます。

もしあなたのご家庭で愛読済みの絵本、良書で図書館へ献本するものがありましたら、中央公民館まで連絡いただきませんか。

広く一般のみなさんに読書願い役立てたいと考えます。

## ＝お礼＝

香川県木田郡牟礼町宮の下にお住いで石材業を経営されている二宮澄男氏（畑出身）より二万円。

愛知県安城市安城町土橋田二五の二にお住いの谷口繁雄氏（田之浦出身）より一万円。

茨木市沢良宜東町十の十一にお住いの宮脇俊守氏（川永田出身）より五千円。

尼崎市三反田字若松三二にお住いの畑中俊治氏（仁田之浜出身）より三千円。

八幡浜市千代田町にお住いで西本医院を経営されている西本正勝氏（中浦出身）より三千円。

山口県下松市生野屋市営住宅一一〇二にお住いの梶田一美氏（奥浦出身）より三千円。

北宇和郡吉田町立間にお住いの谷口福美氏（大浜出身）より三千円。

松岡市安賀多町四の二の七にお住いの中川美栄子さん（中之浜出身）より二千円。

京都市右京区西京極町一坪町千二番地にお住いの武田興氏（奥浦出身）より千円。

それぞれ広報編集の費用にとご寄付いただきました。

紙上より厚くお礼申し上げますとともに、ご健康と活躍をお祈り申し上げます。

## 人

昭和48年12月末現在
世帯数　2,475戸（－2戸）

人口　9,114人（－4人）　男4,339人（－6人）　女4,775人（－5人）

### えんむすび

| 昭和48年12月1日～12月31日 | 氏名 |
|---|---|
| 挙式本籍 | |

### お誕生

| 昭和48年12月1日～12月31日 | おめでとう |
|---|---|

### おくやみ

| 昭和48年12月1日～12月31日 | |
|---|---|